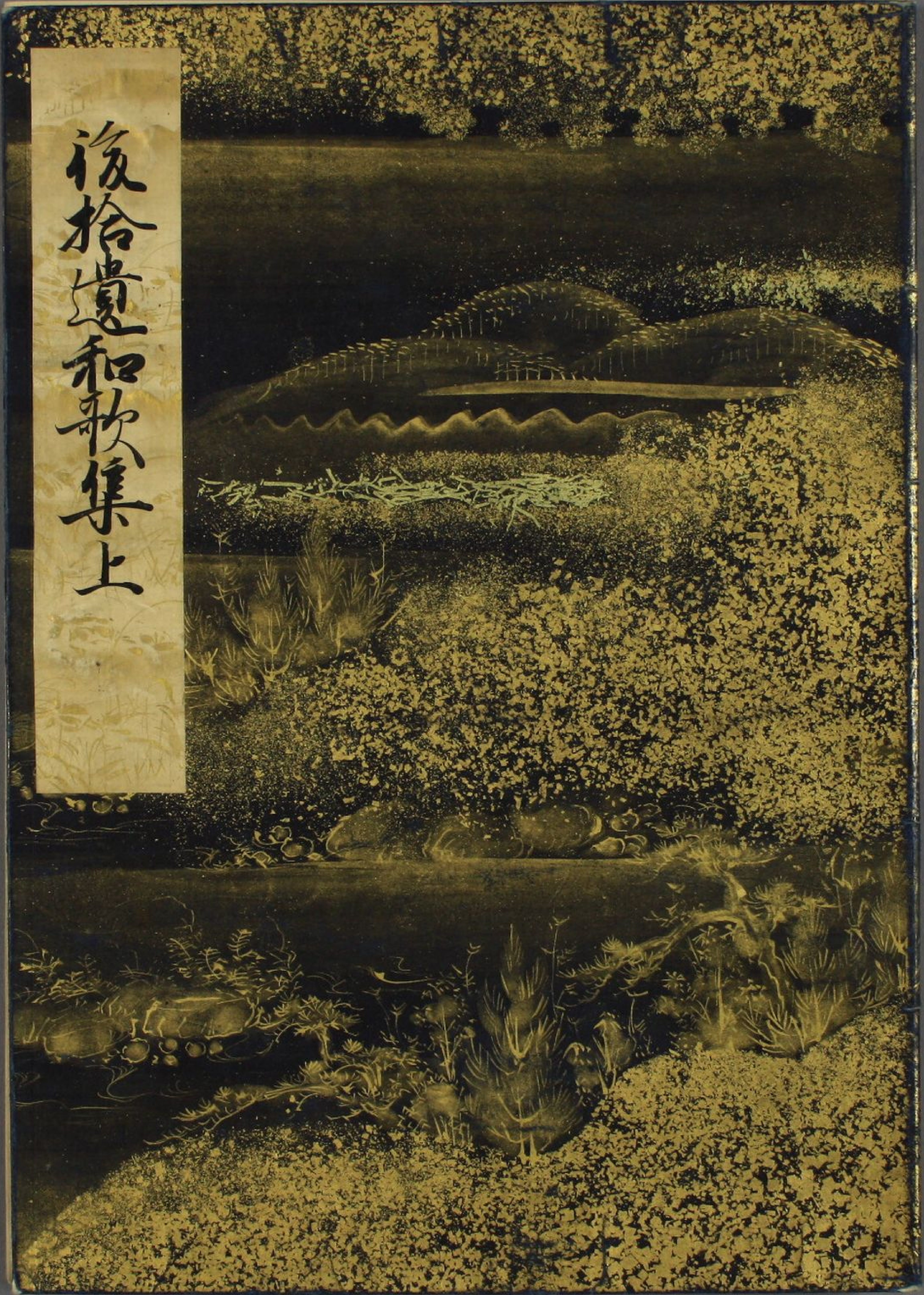
後拾遺和歌集 上



石隱文庫

後拾遺和歌抄序

我君あめのしたしろしめしてよりこのかた
よつのうみなみはしさこゑとあれけの
くにゝけさりの每ゆるすあしおほよそひの
うらによろけのしとわさなはうかふに萩春
月のあさおりにつきことにのそこそむかしくえく
しくゝなきたりしまゝすこれにまりてちく
さふひとゝときく人月にあさきり風りか
はを泌るのあえたて花をとりてかそひともを
あられますといふるなしついまたかえんあ

そひのかまりに志さし由のやまほとうくか
けめはを後ふとかり拾遺集よいては
なつころれたゝきゝとのたしりかくさうれ
あつむへさよしかんあつけりおあせとらけ
後つまろまれくかしくに見んとのりとう
け後つり中之へよのへたまふくと由とに春
このたかせんまろうまてたりひかしくしと
をくるとあてのくてりれ春秋よなりふそり
いあら恋徳のたしめのとし夜されり月のた
けるあまりれろかひやくてれつるさにそ那

よりてそのうたをえらばしけるにそれかうへ
のおほせをたびそのりをふたりにたまへく
ありしなかごとのもしうきいろかうふいその
みふりみくるこえ拾遺集よのせくひとに
ものこそすゑれかみの歌秋ねむしのはまふし
なくおしまの梅のさくりおほうまじとあうにも
よりこれかさいまふいくろまで歌のなかふかり
りそのそのさふもあり天暦の御意より今日
ふいくろまでよいとけきあまり到しける
よしあしとせのまでもみそちふなむよまれよ

けるをみよしれまつもひさしくあつめたまひし
もすゑてを御のまはこのみすゑてぬまで
えくのことみちおろかなりけむふるへりとを
ひろふかんちをつくさんとしてこゝろざしわざとをも
はすかまれしところどころさやまうけのやし
きことてもをつらなりしすこし秋の月の
かくれにしは春の花にまさりしあるといふ歌ふさ
りちとをかまりやけとえらひてそろへまいらせむと
せりなつきて後拾遺和歌抄といふなづけそこ
今後撰ふるきの集より歌いりあへるとも知れ

家の集をかよのもはかり人〳〵もうしこてなふを
はのおしよしきこめむともちかうりあまは
これよのそれありむかしなしつかのいはみ人
といひくかよあしみかゝりのありいまゆう
大中臣能宣清原元輔源順紀時文坂上望城
等これなりされは歌よみれんとえそくまあけの
よにそけるのひふる時まてる人〳〵かりこれ
らの人〳〵のうたを時さとしてすみれのとそこ
のむともかしふてる由くめふつきこゝ給よ
うかふをいまあり世よある人〳〵さしことをうし

くしうしみてさとをいやしはすることわさになり
てちかれよの歌よみをとゝめんとしてなむ
あるへきさにしいはゆましとのちにとむしあふみれは
よしはいひなりさん人〳〵よはこのいはらんいさか
ふこの集をえらへりこれるすくふよのしまれ作ろ
まおしすなりみ兄ちらん万葉集大矣とそえひ
ての〳〵のりてはそひりのと志頼つりのの集れ
らいやとそれとをとくてくきことをはいせり
そのうこの事いまみなかかをすしてゆとくをも
のおゝかりし延喜の御ときみかとは万葉集みか

歌廿巻とえらひて世につたへ給へりいはゆるい
まの古今和歌集これなり村上のみかとにも
よみ人古しく和歌集よりのちくさくさのまき
をえらひいてく後撰集となつく又花山法皇ハ
さらのふる歌乃集よりもれたるうたをえらひ給ひ
て拾遺集となつけ給へりそのよろつ乃集ハよえ
えぬるりのこともみてこころみえりしふかくこれ
かの大納言公任朝臣ハ見そちはまりむかしの歌
人をゑらひいてこれまたあへなる歌りちあまた
まいそちとられいてつ又とそはまりは清らの

歌とあはせて世にひろく人ありしろしめしこのみか
をもやまとりうこれたりしこさのふてまたれをと
えらひてりのよつまことによそへて人のこころを
ゆうけい
ゆうしむかしみてれしるの風まひらうこととえらひく
人まさしわたくしてろふうなつる歌ひとしまされとお
つかへてふるき歯とにくまて集といへりハまもいます
つもてくまとある中にすくれたる歌とうきいて
て金玉乃集となんなつけあるそのことふるふ
おほくまてうちみてこころさきをあらはしたなかしそこの
むかしの集らしこれもやしさもしるうしら

ゆるし玉へけれまことの心をや御なりけむあちこちと
をすこしいふはかりし御ころ能因法師か
いふりのありころ花乃山のかたをわかちて
人のよしあしわかすれはあひしかひさるへからす
とくとえらひて玄々集となつけゝり后葉
まつりあかる世はあまたをふかくありもとをね
さいへつさふかし御ましし此集よのすたるけ
みちのうしき花の集といひおしひきれやまふ
しわさとなりけるへきおりの集といひあめ
てとのたいやしくともひとしろりのかり

これあれあるひはたまりしさとも志らは
まうこまゐそところもつまむしりなりとも
それをへいは山河のあかれとかくみなりてゆく
くさりゆらちふこゝ志をそのまへいつれの
うへさとも志てゆかうし志られたこ後の
の集よのせるかはかりすしてもとさて次
ゆられなりふもこゝろをとりいてかなふて
あまの御しまるしくゆるもありあまた哥
いところくの世あり此中にえらいて乃
つきなさしとれたるもそらひくのおほせそむき

くらしてくらりの実のつくるさなかりしの毬
みつしとあり此集りてやけもなからそちや
なんかのへされかよそこのかりれらしるく梅
のこうしれを梅ゆふよくとうさのく志しなきの
うちこさくるま志きのをねかられあつめあかさ
このミのい思しおまてもそれ木のくまて
あつことうしいされえてつこ緑ハそれ志う
まハかしす月くまあれと名ハくちせぬも
のおまハいつしへといまもなさけあつこるを
せとハゆくも思ふてけくらんしとをとひくえて

つなうし志つうすハあへな俗しくくも風の
まみよちりてひらりあつ玉のことくをけめと
とをまやさえうせなんへとにうりてもなれね
のなかれ秋の夜けしいまのつくと志う
いとれたりいらくまてくみとせよなりあま
もしおなしこさこつれうしのくまれ妹のさ
よひのころかひえくひたつりめうるすり
なんあつもけつといそり

後拾遺和歌抄巻第一

春哥上

正月一日よみ侍ける

小大君

いかにねておくるあしたにいふことそきのふをこそとけふをことしと

みちのくに侍ける時春立日よめる

光朝法師母

出しみよ今は霞もたちぬらん春はこれよりすくとこそきけ

春東よりきたる心をよみ侍ける

源師賢朝臣

東路はなこその関もあるものをいかてか春のこえてきつらん

立春日よみ侍ける

橘俊綱臣

相坂の関をや春もこえつらん音羽の山のけふはかすめる

寛和二年花山院哥合によみ侍ける

大中臣能宣朝臣

春はくる夜のまはみよしのゝ山にたなひく霞なりけり

としこもりに小山寺に侍けるに春ハいつく
ふる人のもとへつかはしける

今日返りぬと思ひかひもなく年を山路とこゆる哉

山寺に正月小雪のふりけるをよめる

平兼盛

雪深て在ふきゆふ山里にいかてか春のきたるらん

題不知

加賀左衛門

新き春ハくれとも身にとまる年ハふえつゝ積もるそをしけれ

天暦三年太政大臣の七十賀し侍りける屏風によめる

大中臣能宣朝臣

ゐつりゐても沢辺に見ゆる菊の花のねとハけりまた出る春はたれ

一条院御時殿上の春はてとてこひ侍りけれハよめる

紫式部

見よしのハ春のけしきに霞ともむすほゝれたる雪下草

花山院歌合によみ侍ける

藤原長能

谷川の水もいまた消あへぬに峯の霞ハたなひきにけり

藤原隆経朝臣

春とにハ谷への雪もえぬるかはるゝ霞や立ぬらん

和泉式部

春霞立やおそきと山川の岩まをくゝる音聞ゆ也

鷹司殿七十賀の月次屏風源時宮の

とふらひをよめる
前律師
紫の袖をつらねてきたるかな春たつことはこれそ嬉しき
春臨時客をよめる
小弁
むまてらる文人は春をくらゐになかめつゝめてきかな
入道前太政大臣大饗し侍ける屏風に
臨時客のこゝろをよめる
藤原輔平卿（平イ）
紫もあかきも緑もともに連ねさは春のはしめにきたるかな

同屏風に大饗のかゝれたる所をよみ侍ける
入道前太政大臣
老ませとやまとつたへしひきためしのこれ雑子はこゝろやすし
民部卿泰憲近江守に侍ける時三井寺
にて哥合し侍りけるによめる
読人不知
春たちて猶白雪と鶯はちりぬとやいはそれなかるらん
鶯をよみ侍ける
大中臣能宣朝臣
山高み雪ふる里を鶯はいつか初音は春にそなくらん（まつらん）

正月二日あふさかにてうくひすのこゑを
きゝてよめる

源兼澄

ふるさとへゆく人あらはことつてむけふ鶯の初音きゝつと

選子内親王いつきときこえけるとき正月
三日上達部あまたまいりてむめのえを
とりてひくかそへ侍けるにうちより
かへりいたすとてよみ侍ける

読人しらす

めりはらんゆきてみくるさ山里に春をしらする鶯の声

かいはけるに人まかりて侍ける比鶯なく
をきゝてよみ侍ける

清原元輔

鶯のねはかりそきこえける春のくるゝをしらぬ人の宿には

俊綱朝臣家にて春山里に人をたつ
ぬといふことをよめる

藤原範永朝臣

たつねつる宿は霞にうつもれて谷の鶯一こゑそする

小野宮太政大臣家にて子日し侍ける
によみ侍ける

清原元輔

千とせへん宿のねのひの松をこそほかのためしにひかんとすらん

和泉式部

題不知

引つれてけふは子日の松にまた今千とせをその へに出つる

正月子日にあたりて松のもとにすさひよ
むかし人待けるを見てよめる

よみ人しらす

春の野に出ぬ子の日はよろ人のかひりとやなりそ有らん

正月子日にあたりて待ける 良暹法師

のりとりねのひしにあんなりつくさな
とひとく待けるに又もなにとせて日
暮まてかれはよみくつりけり

賀茂成助

今日は君いかなる野へに子日して人のまつをは志らぬなるらん

今上六条におはしまして上達部らへ
わおのこともなかりしほにかりて子
日し待けるによみ侍る

右大臣小弁

袖をもて引そやらまぬ小松原いつまてとしもしらぬ毎はきこに

三条院御時に上達部殿上人なと子の日

せんさし給けるに新院女房ふたとくたりよ
みむとし給ふをとてゆりにたれは新院に
たてまつりける

堀河右大臣

ときはゝ子日の松をたつぬれはひさしきためしよむるかな

民部卿経信

あさ緑野への霞たなひくにけふの小松をまかせつるかな

承暦六年内裏哥合によみ給ける

左近中将公実

君か代はきさきて嬉しは子日する松の千とせを数かさね

正月七日子日にあたりてゆきふり給けるによめる

伊勢大輔

人はみな野への小松をひきにゆくけさのわかなは雪やつむらん

正月七日卯日にあたりて侍けるに今日は
うつえにさそへなしと通宗朝臣のもとより
いひおこせて侍ければよめる

卯つえつきさつまかきにはあまねくに君かとしひの子のかす

題不知

大中臣能宣

白雪のまたふる里の春日野にいさ打拂ひわかなつみみん

和泉式部

春日野は雪のみつむと見しかとも生出る物は若菜なりけり

後冷泉院御時皇后宮歌合によみ侍ける

中原頼成妻

摘よる人は誰ともあかりけり我さへ野の若菜なれとも

正月七日周防内侍のもとへつかはしける

藤三位

数しらすかさなる年を鶯の声するかたの若菜ともかな

長楽寺にて故郷霞といふ心をよみ侍ける

大江正言

山たかみ都の春をみ渡せはたゝ一むらの霞なりけり

能因法師

よそにてそ霞たなひくふる里の都の春はみるへかりける

題不知

選子内親王

春はまつ霞よそふ山里を立よりてとふ人のなきかな

春なふそといふところにあそひきと見くよみ侍ける

藤原節信

あらくと八重にたちふかく網のあなひく物は霞なりけり

題しらす

曽祢好忠

みしま江につのくみ渡る葦の根の一よのほとに春めきにけり

正月ついたちころ人の
もとにいひつかはしける
能因法師
心あらん人にみせはや津の国の難波わたりの春の景色を
題しらす　よみ人不知
難波潟浦吹風に波たてはつのくむ蘆のみえみ見えすみ
春駒をよめる
権僧正静円
あら川野のまくろは荒沢のこめ冬立つむ駒そいはゆ
長久二年弘徽殿女御歌合し侍ける

同春駒をよめる
源兼長
立はなれ沢辺になるゝ春駒はおのか影をや友とみるらん
屏風の絵にとりおほくもまとゐかたある
人の眺望するところをよめる
藤原長能
うりこゝ所てもみ渡しゝ霞の初原に雉子鳴なり
題しらす
和泉式部
秋まての命もしらす春の野に萩のふるねをやくとやく哉
後冷泉院御時さふらいの男共哥合り

のこりたる雪をよめる

藤原範永朝臣

花とみてをらまほしきは難波えの蘆のわか葉にふれる白雪

屏風の絵に梅花ある家に男きたる所を
よめる

平兼盛

梅か香をたよりの風や吹つらん春めつらしく君かきませる

ある所の歌合によめる

大中臣能宣朝臣

梅も匂ふあたりの夕くれはあやなく人にあやまたれつゝ

春の夜のやみはあやなしといふことを

前大納言公任

春の夜のやみにしあれは匂ひくる梅よりほかの花なかりけり

大江嘉言

梅か香を夜半の嵐の吹ためて槙の板戸のあくるまちけり

村上の御時御前の紅梅を女蔵人によませ給けるにかはりてよみ侍る

清原元輔

梅の花かはことことに匂はねとうすくこくこそ色はさきけれ

山里にすみけるころ梅花をよめる

読人しらす

我宿の垣ね乃梅のうつり香ハ独ねもせぬ心ちこそすれ

読人しらす　　前大納言公任

わか宿の梅の盛りにくる人ハおとろくはかり袖そ匂へる

梅かえにふりつむ雪ハひとゝせに二たひ咲る花かとそ見る

和泉式部

春ハたゝ我宿にのミ梅咲かハかれにし人も見にときなまし

山家乃梅花をよめる

賀茂成助

梅の花垣ねに匂ふ山里ハ行かふ人の心をそ見る

春風夜芳といふことをよみ侍ける

藤原顕綱朝臣

梅の花かはかり匂ふ春乃夜のやみハ風こそうれしかりけれ

梅花をよみ侍ける　　素意法師

梅か枝を折ハつゝしる衣手におもひもかけぬうつりかそする

太皇太后宮東三条にくらさせ給ける

せ給けるに家乃紅梅をうつしうへて侍く

花のかりよ志のひに匂ひていとおもしろくさかへたるにむすひつけ侍

ける　　弁乳母

香はかりハ匂ひおこりとも梅の花ちりのまかふとゝひしるか

題しらす　大江嘉言

我宿にうゑぬはかりそ梅乃花あるしなりともかはかりそみん

清基法師

風吹はをちの垣根の梅花香は我宿のものにそ有ける

道雅三位八条の障子に人の家なる梅
木あるところに女なかめてある人
まつ所をよめる

藤原経衡

わくらはにまちみん梅乃花香をも水にかかりてちらしそへなん

水邊梅花といふ事を

平経章朝臣

来むといふ人のまとをまつ宿の梅乃下枝の水のかかるまて
長京よとみ給けるところ二月ついたち人
のりとにいひつかはしける

上東門院中将

とひやまの霧ふかき山里にたまかれの香ひつまく

題しらす　小弁

わか心に梅をとかめこにか山田と又うつ人に香はさそひ
四方をとよみん

赤染衛門

うくひす雲の遠にかよふなり御垣のうちをとゝめよこゑ

藤原通俊朝臣

谷の戸の鶯のいでてその春をとふらむみえん

とゝめおきそみえんうくひすの行へをきくまゝにまたれ

馬内侍

鶯の雲ふかく玉章とこそゆかしきにまつ鶯の

津守国基

都にはまだいふに堅て鶯の九重のさとにいまそ初音

弁乳母

屏風に二月ばかり山田うつところ

かりがねをとよみ侍ける

大中臣能宣

雁のよそにかへるかつ小山田の苗代水(のり)にかげもとまらん

天徳四年内裏歌合に柳をよめる

坂上望城

わか玉の年をへにける青柳の糸はいつまでの春にたゆ(よりか)さ

柳池水をといふことをよめる

藤原経衡

池の面にさしとくる青柳のそこはかとなくみなれてそみる

題しらず

藤原元真

浅みとり乱てなひく青柳の色にそ春の風もみえける

二月はかりに良暹法師のもとにまかりたれは
まうて侍れは花見にいてぬときゝて
いひつかはしける

藤原孝善

春霞たつの山の桜まておそくとはすこしゆくらん
人に花見にありけりとこそつてこし
きつ

藤原隆経朝臣

山桜見に行たとてへたつれは人の心そみすきなりける
これはしきされたる後撰朝臣かもの

家にて人々花見にまかりけるに
まとゐもせて行しかぬ世に侍る

皇后宮美作

うら山しいつともなくかつさくら花見の里人もまちぬるに
けふの花をやさけりとそ

賀茂成助

小萩咲秋まてあらはおもひいてん嵯峨野をやきし春はその日と

題しらす

永源法師

桜花咲かはちりなんと思ふよりかねても風のいとはしきかな

中原致時

梅か香を桜の花に匂はせて柳か枝にさかせてしか

橘元任

あきいまた霧のまよゆらむ山桜花いりさに人もなく遅

一条院御時殿上人々花見にまかりて女のもとにつかはしける

源雅道朝臣

折は折しはいつく山桜まちをしらす君にみせなく

返し

盛少将

おしてあらむにつれし山桜風にちらさし折しとそ思ふ

後冷泉院御時うへの男ともみにまかりてうたなとよみて高倉の一宮の方にかへりまゐりて侍けるに

一宮駿河

とひやまんかりは桜花さかむよに人をまそれやはとる

今上の御時殿上の人々花見にまかりいてけるに中宮乃御方よりとて人にかはりてつかはしける

右大臣北方

あくるゝ心はかりは山桜霞ある人へりたくへてそやる

障子の絵に花おほかる里に女ある所を

源兼澄

今こんと契りし人のおほくはゝ花のさかりをすこしのこさん
花ふ知

祭主輔親

いつまてか分てたつねし山桜心のまゝに枝しけけれは

菅原為信

引と漏る雨そ春ハなかりけり花よりのちのあさねかさりハ
ことときもせと思ひぬといふらしとみる

小弁

山桜人のまにまに見さかてへさそ花の袖ハ志つけし
長楽寺よ徒然の院ゟ山里ん

桜いつしかおりきれいよみ侍けり

上東門院中将

白雲乃花の都乃空にして物にむつき山桜かな
白河院にてむものをとめてしよみ侍けり

民部卿長家

東路の人ゝ問や白河乃関にもかゝやさもいふかと
南殿桜をみてよめる

高岳頼言

みやこ小花のきもて乃男なれ人は雲井へまてそかり
し人乃男ともも春ん花よよみすといふこそ

をよみ侍ける哥

大貳三位

春ことにみるとはすれと桜花あかても年のつもりぬるかな

花をおしむ心をよめる

大中臣能宣朝臣

桜花匂ふなこりに大かたの春さへおしくおもほゆるかな

河原院にて遠山桜といふ心をよめる

平兼盛

白雲とみゆるに桜なかりせはよそにてやかてすきやしなまし

夜思桜といふことをよめる

能因法師

桜花春はよそになりせは暮をまつにも思ひはしらましさくらをうつしてけ待ちにけるかな

よめる

よみ人しらす

植をきし人なき宿の桜花匂ひはかりそかはらさりける

とをきところに侍りて道に桜を見やりてよめる

いせのたいふ

都人いかゝと問はゝみせもせんこの山桜一えたもかな

題しらす

人もみぬ宿に桜を植たれは花もてやつす身とそなりぬる

我宿の桜はかひもなかりけりあるしからこそ人もみにくれ

道命法師

花みにと人は山辺に入果て春は都そさひしかりける

紫式部

世中をなになけかまし山桜花みる程の心なりせは

なけかしきこと侍けるころ花を見てよめる

藤原公経朝臣

花みてそ身のうさも忘らるゝ春は限のなからましかは

堀河右大臣の九条家にて毎山有春といふことをよみ侍ける

前中納言匡房

我宿の梢はかりとみし程に四方の山辺に春はきにけり

題しらす

藤原元真

こひつゝ花にそこゆる桜花も春はねたくなりしましかは

承暦二年内裏歌合によめる

右大弁通俊

春のうちはちらぬ桜とみてしかなさてもや風のうしろめたきと

屏風に桜咲たる所をよめる

平兼盛

花みつゝ山路にたそくゆかはゆらとなきし妹やまたん

屏風の絵に三月花宴する所にある

人さくら花をよめる

一とせに二たひもこぬ春なれはいとなくけふは花をこそ見れ

後冷泉院御時春宮と申けるときの

花のころともさそひて雲林院にまかりゆか

まけるにつかうまつる

良暹法師

嵐山し春の家人打むれて花のかけにやむれをみるらん

通宗朝臣能登守に侍ける時国にて

哥合し侍けるによめる

源縁法師

山桜白雲にのみまかへはや春人の宮になけかん

宇治前太政大臣花見になんまかりたまふとて

てはへりけるしけり

民部卿斉信

いにしへのむかし人は都をおもひは春ふともたてゝ風をたち

侍しもへきとしかえしあまて御

ことにいひ侍れと三月たちより

白河ありまいりけるをとさて相撲ゝも

やよりくをありけることいひおこ
せて侍りければ

中納言定頼

桜花盛になれは故郷のむくらの門もさゝれさりけり

遠花雖家といふことをよめる

坂上定成

よそにみる猶さくらの匂ひなれ誰か宿のぬしとみるらん

よしことにもをみるといふことをよめる

源縁法師

春毎にみれともあかす山桜としや花の咲まさるらん

賀陽院花さかりにしのひて東山乃花
見にまかりありきされは宇治前太政大
臣きゝてこのころいかなる哥かよみたる
ととはせ侍けれは久しく田中に侍て
はかはかしき哥もよみ侍らすけふかくなん
おもひ侍るとてよみ侍る

能因法師

世中をおもひ捨てし身なれとも心よはしと花にそみえぬる

太政大臣いとあはれかりてかつけ物
とし侍けり

義作にめかりくたり侍けるりおほい
まうちきみのとまりのしるし思ひて
花永卿信れりとハつかりけり

世の中にとゝまることもなや桜花昔の袂にちりて見え
ありし一家の女房花見に白河に
ゆきまかりけるにいひよみ侍る

伊實少将

行人を春の形見に思はましかはふ白河のたのみさらませ

内の大いまうちきみの家にて人々さけた
うへて哥よみ侍るに山桜をのそむと
いふ心を

大江匡房朝臣

高砂の尾上の桜咲にけり外山の霞たゝすもあらなむ

藤原清家

吉野山八重たつ峰の白雲にかさねてみゆる花桜かな

周防にまかりて侍りけるに家のもとに
しのひてよみ侍る

藤原通宗朝臣

ひかへてとなりにすまゐ桜花そのほとに母ありせは
花のちるにも人ことゝふ心と

良暹法師

同心を宿にはなし山桜散てのみこそ春しなきれは

基長中納言東山に花見に侍りけるに小舎人ともして小法師めくらせ侍りけれは

加賀左衛門

春までは桜ねはせなむ来れなはなかなかにてはものゝなくて幾

東三條院の御屏風に桜人の山桜見たる所を

源道済

春きてはやまの人もとほくもえみえつる山桜の郷

同御屏風の家に桜の花おもしろき所に人々あつまりてあそふ

我宿に咲みちにける桜花外には春もあらしとそ思ふ

大納言公任花折りにこむといひてをとつれ侍らさりけれは

中務卿具平親王

花とみるちりなん後は我宿に何につけてか人もまちけん

後拾遺和歌抄巻第二

春下

三月三日桃の花を御覧じて

花山院御製

みちよへてなるてふ桃のことしより花さく春にあひ初にけり

天暦御時屏風に桃の花ある所を

清原元輔

あかなくに千世まてかさせ桃の花花もかはらし春もたえねは

世尊寺の桃の花をよみ侍ける

出羽弁

ふるさとの花は物いふ世なりせはいかに昔のことをとはまし

永承五年六月祐子内親王家歌合に

堀河右大臣

桜花あかぬあまりにおもふかなちらすは人やおしまさらまし

題不知

内大臣

折とめ花散もとめてもたひに春の山へをとふみるそ

天徳四年歌合に

平兼盛

世の中に歎きもとおもはなん桜花ちらぬ心のあるらん

大中臣能宣朝臣

桜をまつこゝろにちりて何ふかり恙ぬ人の情むかし
屏風にも桜花咲とおしみかなかなしと

源道済

山里に咲そめしさくらは誰とふかなて人そ待らん
たか家やきて待けるとおもふに待遠に
こゝろて待けるにいつきの花を待てかへ
家人ありて桜いとおりゐてちりを
まいよめる

右大弁通俊

たかゆひのをのこなり桜を折まれつやかなかほ
山路落花をよめる

桜花みねまて咲にまかりいてはるへきさ志賀の山越
落花をよめる

橘成元

桜ちる落はいとふ春風はふきなさ宿そ嫌ひけれはけ
花の庭に咲く待けるかりそてよめる

坂上定成

ものをこそ思ひ折きこし袖とゆかす庭と見えつゝ

清原元輔

承暦二年内裏後番歌合に桜をよめる

藤原通宗朝臣

打むれてちりしく庭をみて桜をもあかぬ心そとはなりける

題しらす　　永源法師

心からをとそおもひし桜花（山桜）ちらぬさきには花をとみしや

三月廿日花のちるをみてよみ侍ける

土御門内大臣殿

うき山しけるものを数にきみ桜ちるをもよそにみなして

永承五年六月五日祐子内親王家歌合

大弐三位

吹風をなにいとひけむ桜花ちりてそ春はしられなりける

題しらす　　中納言定頼

年をへて花に心をくたくかな惜むにとまる春はなけれと

桜のちりてみえなからいとよめる

大江嘉言

家にこぬ人をもみよとて桜をも水の心にまかせてそやる

白河にて花のちりてなかれけるをよみ侍ける

土御門右大臣

引をもせきそとめなん白河の水のなかれに春をゆかさし

粟田右大臣家にて人々ちりのこりの花を

打しみ侍るによめる

藤原為時

たてまつても咲へきものはさりなき身と限るとも思ひおかれ

庭の桜花をしくちりて侍けれハ

和泉式部

風ふかは吹拂はすハ庭桜散ともしるき跡ハみましを

三月廿日小野 第をよみ侍ける

藤原義孝

野辺これハ弥生乃月のはつるとも追風にきさらむまつ

待しをまつ

和泉式部

岩清水しれもそみつせこゝろ遠く流深乃色にハ見えねハ

まかひとつ深の色とみへなつさまかも岩つしかな

藤原義孝

月乃桜とふ雨よ降りて元輔恵慶か

ともくして庭乃藤花をとりてあそ

ひしよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

藤の花ゆかりとなれハ庭乃面よ色ひとり重ね咲て立けり

匂ひしらす

赤染衛門

紫のや志か深ころ藤の花いけふもひさすね侍て立ける

源為善朝臣

藤のなみてうちよせいこ宗我りとゆひのらとやそふらん

嘉暦二年内裏歌合に藤の心をよめる

大納言実季

我庭に咲かゝるみゆかの岸の岩ねふかくの藤なみ

民部卿泰憲近江守に侍ける時三井寺にて歌合し侍けるに藤花をよみ侍りける

よみ人しらす

住吉の松にかゝりて咲藤のなみこそうち岸の藤なみ

題しらす

藤原伊家

花とのみ見てやゝしゆき過なむ堂色八重やは咲ぬ山ふきを

大弐高遠

沼水に蛙なくなりむへしこそ岸の山ふきさかりなりけれ

長久二年弘徽殿女御歌合にかはつをよめる

良暹法師

見かくれてすたく蛙の声〳〵にさはきそ渡る井手の浮草

題しらす

藤原長能

都絶てはゐ中のへみちとりまちとくおもひきくかな

法輪に道命法師の侍けるころひにはかりけるにまかりてよみてゐれなさけれは

法圓法師

我ひとり聞捨るかなしさに二声まてはなきわたれ

三月晦日に郭公鳴を聞てよめる

中納言定頼

時鳥思ひもかけぬ春なけはことしそ待て初音きゝつる

三月晦日春惜心人々よみけるに

大中臣能宣朝臣

郭公なかすはなかすいかにして暮の春をまたもくはへん

三月尽日ねやのたうにまかりてよめる

永胤法師

思ひ出ることのみしけき身にはこそ又春にさへ別ぬるかな

後拾遺和歌抄巻第三

夏部

四月一日よめる

和泉式部

桜色に染し衣をぬきかへて山郭公けふよりそまつ

四月一日郭公をまつこゝろをよめる

藤原明衡朝臣

明るまておもひもしらてけふはまたるゝ郭公

津のくにのこやといふ所にてよめる

能因法師

我宿のこすゑの夏になる時はいこまの山そみえすなり行（けり）

冷泉院春宮と申ける時百首歌たてまつりけるに

源重之

夏草はむすふはかりに成にけりのかひし駒やあくかれぬらん

題しらす

曾祢好忠

榊とる卯月になれは神山のならの葉かしはもとつ葉もなし

山里にくゐなをとよみ侍ける

大中臣輔弘

八重茂る葎の門のいふせきに鎖（さゝ）すや何とたゝく水鶏そ

山家卯花をよめる

藤原通宗朝臣

訪ねくる人もなき山里に我みよとてや咲る卯花

民部卿泰憲近江守に侍る時三井寺にて歌合し侍けるに卯花をよめる

読人しらす

白浪の音せて立とみえつるは卯花咲る垣ね成けり

読人しらす

月影を色にて咲る卯花は明は有明の心ちこそすれ

ある所の歌合に卯花をよめる

大中臣能宣朝臣

卯花の咲るあたりは時ならぬ雪ふる里の垣ねとそみる

正子内親王絵あはせし侍けるによみ侍ける

相模

みわたせは波のしからみかけてけり卯花咲る玉川の里

伊勢大輔

卯花の咲る垣ねは白浪の立田の川の井せきとそみる

卯花をよめる

源道済

宮こにはあやまれて卯月ばかりにそこなる山里
修行しの大山寺といふ所にて六合し
侍けるをりによめる

元慶法師

我宿の垣ねはかりとしれそ時鳥いつまて里の里をおもふらむ

題不知

慶範法師

郭公我はまちてそみつるとふとめぐりたゞふた声きゝは

四月つこもりに右近のむまはにて郭公
きかんとて出まかりけるに来ぬよ待まて
なきて侍しかりつそれは

堀川右大臣

時鳥ねくらを出て雲ゐにさてや宮こにはへん

道命法師山寺に侍けるにつかはしける

藤原尚忠

宮こにはわつらさ待かしさは足引の山時鳥いかになくらん

返し

道命法師

足引の山時鳥みゝなれすおかしく鳥の声も宮こえを

媄子内親王うせ侍りのゝちさしと雲えけると紀
女房みな侍けると年経て後三条院よ
侍きる人のりにむかしと思ひそまかりれ

くさのくさなちにけるをしけり

皇后宮家泰作

こころやすくのこゑは岸郭公ありしむかしのあるはたえと
祭侍てやむあふちに侍けるよ人〃こころ
ひよかくとなひ侍ところと太政大臣房
え侍し所にまけはいつかりしもの

備前典侍

郭公なのりしてこそしらるなれ数ならぬ人よ告やらまし
四月許あるは海よりかへりて郭公を
つれしへの中侍られは

大中臣能宣朝臣

宿捨てあるここにきかん時鳥あなたよ我は山路こえむ

増基法師

いましへこふるころの中にのみ郭公をまちて
ひとはねてのこそまつ時鳥しもしる都のやかたにあやせよ

題不知

梅貫茂

有明のまは海ところになほ時鳥明てさらそとうきてきこせ

永承五年六月五日祐子内親王家歌合よ

伊勢大輔

宿ちかくさらずすとこそなく時鳥しまたらず里の一声

能因法師

夜たにあけは尋てきかむ郭公篠田の杜の方に鳴也

藤原兼房朝臣

宵の間はさてもやねぬと郭公二聲きける人も有けり

小弁

ねぬ夜らの数つもりぬる時鳥聲をまちつる一聲なら

祐子内親王家歌合し侍けるまたの日

人々おなし題をよみ侍けるに

宇治前太政大臣

在明の月たにあれや郭公たゝ一聲の行方もみん

宇治前太政大臣三十講後歌合し侍

けるにほとゝきすをよめる

赤染衛門

なかぬ夜もなく夜もおなし郭公待とてやすくやねらる

夜りすゝ待つ程を郭公又あふ成てとまりけれは

おひそのもりをすくとて郭公を聞てよめる

大江公資朝臣

東路の思出にせんほとゝきすおひその杜の夜半の一声

郭公をきゝて

法橋忠命 園城寺

きけるや初音ならん時鳥老いは寝覚ぞあやしかりける

長保五年五月十五日入道前太政大臣家
哥合に壷を時鳥をききてといふ心を

大江嘉言

何方と聞だにわかす時鳥たゝ一声の心まとひに

五月斗に東深くありといひつかはしける

道命法師

郭公鳴けりとこそとひつまで聞て五月の夜もねさりき

時鳥我深き声をそきこゆるのに独初音ハ人のともしらなん

おほやけの御つかひにまかりけるに 山寺なり

待けるにかれこれ次と聞てよめる

律師長舜

一声もきこえてこそいにし時鳥ともにふかく有と思ひけるかな

郭公をよめる

能因法師

時鳥こゝろなよひの声はおもしろし一来はきゝ捨て

大貳三位

まてぬ秋も待まてこそつ時鳥たゝあからさまにおとつれは

小弁

袖ての上や人ハ待らん郭公初音ハ宿にきかまほしけれ

さなへをよめる

曾禰好忠

こゝやりつきのふは五月になかりけりいそけや早苗老もされ

永承六年五月五日殿上根合にさなへ
とよめる

藤原隆資

五月雨は日ころ経ぬれはたきゝ山田なるへくもそね

宇治前太政大臣家三十講歌合に五月雨
をよめる

相模

五月雨はみつの御まきのまこも草刈ほす隙もあらしとそ思

家にて経長かつくれる山里にて五月雨をよ
める

藤原範永朝臣

五月雨は見えし小篠の原もなしあさかの沼の心地のみして

橘俊綱朝臣

つれ〳〵と絶せぬ物は五月雨のはやかはの庭なりけり

題不知

叡覚法師

五月雨はをやむまもなきみなせ河のさかひもなかりけり

五月五日さしめくるあめのふりてよめる

恵慶法師

あやめ草ねをそてにふる人のなかをはやみの駒の足さへたゝり

永承六年五月五日殿上根合によめる

良暹法師

はくまえの庭ふるさとゝそなりにけるひきつるやあやめねをそ知

太大臣中将に侍ける時歌合し侍るに

よめる

大中臣輔弘

園の上にねさしとゝめよあやめ草引てかへしも遠きまて

としころすみ侍ける所はなれてほかに

まかりて又のとし五月五日によめる

伊勢大輔

今日も今日菖蒲もあやめかはらぬに宿こそありし宿とおほえね

花たちはなをよめる

相模

五月雨の空なつかしく匂ふかな花橘に風や吹らん

前大宰大弐高遠

昔をは花橘のなかりせは何につけてか思ひ出まし

かくれたるをよめる

源重之

をともせて思ひにもゆる蛍こそ鳴虫よりも哀なりけれ

宇治前太政大臣家歌合し侍

けるに蛍をよめる

藤原良経朝臣

澤水に空なる星の移るかとみゆるは夜半の蛍なりけり

題しらず　　　能因法師

ひとへなる蝉の羽衣夏ハ猶うすしといへとあつくそ有ける

源重之

夏刈の玉江の蘆を踏しだきむれゐる鳥の立空そなき

曽祢好忠

夏衣立田川原の柳かけすゝみにきつゝならす
ころかなとよめり

源頼実

夏の日になるまて消ぬ冬氷春立風やよきて吹らん

夏夜月といふことをよみ侍ける

土御門右大臣

夏の夜の月ハ程なく入ぬともやとれる水に影をとゝめよ

大弐資通

何かたハ明ぬるしるしと思ふまてかゝるはかなき夏の夜の月

宇治前太政大臣家三十講歌合に

民部卿長家

夏の夜も涼しかりけり月影ハ庭白妙に霜とみえつゝ

中納言定頼

とこなつに匂へる庭ハからくにの織れる錦もしかしとそ思ふ

道済家にて人々あめの朝とこなつをよ
りふかくみ侍ける

能因法師

いかならんこよひの雨に床夏のけさは露のおきそまさらん

題不知

曾禰好忠

末くみよといりかたちに生やらん我独めつる床夏の花

平兼盛朝臣

夏ふかくなりそしにける大あらきの森の下草なへて人かる

夏のはしくさきんをよみ侍ける

堀河右大臣

程もなく夏の涼しくなりぬるは人にしられて秋やきぬらん

暮の夏在明の月をよみ侍ける

内大臣 左大臣師実一男

夏の夜の在明の月をみるほとに秋をもまたて風そ涼しき

俊綱朝臣のもとにて晩涼如秋といふ
こころをよみ侍ける

源頼綱朝臣

夏山のならの葉そよく夕暮はことしも秋の心ちこそすれ

屏風の絵にをくら山なるの池のかきたる
ところ

大中臣能宣朝臣

[illegible]山林[illegible]
泉声夜よりてきこゆといふこゝろを
よめる　　　　源師賢朝臣
さよふかき岩井の水の音きけはむすふ袖も涼しかりけり
六月はらへをよめる　　　　伊勢大輔
水上もあらふる心あるらし波もなこしの
はらへしつれは

後拾遺和歌抄巻第四
秋歌上
秋立日よめる　　　　よみ人しらす
うちつけに袂涼しくおほゆるは衣に秋はきたるなりけり
　　　　恵慶法師
浅茅原玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋はきにけり
扇の歌よみ侍けるに
　　　　藤原為頼朝臣
大かたの秋くるからに身にちかくならす扇の風のかはれる

七月六日よみ侍ける

小弁

一とせのまちつるよはを七夕のこひしと秋といふにやあらん

七月七日庚申にあたりて侍けるによめる

大江佐経

いとゝしく露けかるらん七夕のねぬよにあへるあまの羽衣

七月七日をよめる

小大進

七夕はあさひく糸のみたれつゝとくとやけふの暮を待らん

七月七日宇治前太政大臣の賀陽院家にて人々さけなとたうへてあそひ侍けるに

憶牛女志といふことをよめる

堀河右大臣

七夕は雲の衣を引かさねかへさてぬるやしてあきなるらん

七月七日かちの葉にかきつけ侍ける

上総乳母

天河とわたる舟のかちの葉に思ふことをもかきつくるかな

長能家にて七夕をよめる

能因法師

秋のよをなかきものとは星合のかけみぬ人のいふにそありける

七月七日によめる

橘元任

七夕の逢瀬の数のとひはくも今月毎のかねならませは

右大将通房

待えたる一秋なりと七夕のあひみぬ程とおもふましは

七月七日たとこれきふ乃ことはをそもいてしはいとと待けるにすしもおもふにこれはさあひの空とよみ待ける

新左衛門

忌まはゝ今宵逢をや天河いはま星乃うちもさかさと

七月七日風いたく吹く新院にて七夕まつり侍りて八日まてあふへきにとくさつり待けるによめる

小弁

玉さかに逢ことよりも七夕はけふまつるをや珍しとみる

居易初到香山心と読侍ける

藤原家経朝臣

急さ流残そる山里にいつよりあつ秋の月そも客依月来とらふたとうへの杉のこともよみ侍りけり

右近中将公実

三五夜は人をとひけり秋のよハ月出ハとそ待へりけ

花山院東家とやけける時閑院にまか

りて秋月を翫ひ侍けるによめる

大貳高遠

秋のよの月かんに出て我ハ宿ね我も左的のいそて呼え

三条太政大臣左右をわかちてせんさい植

侍くるまんそゑのかりの十六人えらひて

歌よみ侍けるに水上秋月といふ心をよ

める

平兼盛

ふかりかくそまとうそへて池のよ光とそ宿れるなの月

土御門右大臣家にて歌合し侍けるに

秋の月をよめる

源為善朝臣

大空の月の光あかきれハ桂の枝も秋ハ侍まき

河原院にてよみ侍ける

恵慶法師

すたきけん昔の人もなき宿にたゝ影するハ秋のよの月

題不知

永源法師

身をつめハ人をおしまし秋の月出てなるをも人を待らん

蔵人になりて秋南殿の月をよりてつ
そひくよみ侍ける

源道済

よそなりし雲のうへにてみる時も秋の月にはあかすそ有ける

寛和元年八月十日内裏歌合によ
み侍ける

藤原長能

いつも見る月そと思へと秋の夜はいかなる影をそふるなるらん

八月許月の雲かくれけるをよめる

前大納言公任

すむとてもいくよもすきし世の中に曇かちなる秋のよの月

しろはみ月を見てよめる

藤原範永朝臣

すむ人もあれたる山里の秋のよは月の光もさひしかりけり

山寺に侍ける人にてさそひ侍り
けるによめる

素意法師

とふ人もあらしは海の山里にわれならてすむ秋のよの月

藤原国房

題しらす

白妙の衣の袖を霜かとて（とみて）はらへは八月の光なりけり

八月十五夜月をよめる

惟宗為経

いにしへの月かゝりせは葛城の神はよるとも契らさらまし

堀河右大臣

終夜すみのほる月をなかむれは山の端ちかくなりにけるかな

藤原隆成

うきまゝにいとひし身こそおしまるれあれはそみける秋のよの月

前深覚

こよひこそ世にある人はゆかしけれいつくもかくや月をみるらん

題しらす　よみ人不知

秋の殊に今宵も月を月雨も雨みる君とさえ

おなしへの陽成院にて八月十五夜月おもしろく

りして侍りけるにかの前太政大臣家

にあひ侍れは光源法師のよみ侍ると

清原元輔

色の花の紐とく女郎花にちよまつ虫の声そきこゆる

たくもしれぬ思をやそてしかな

大江公資朝臣

とやかへり我てかしこく鶉鳴なるをきゝすむ虫の思

前大納言公任

としへぬる程もおもはす鈴虫のふり行まゝに思のまされは

返し

四条中宮

ふる人をいかなる年とてかは庭のむしもしけき哉

長恨哥の絵に玄宗もとの所にかへりてむ
しとともなきくさもかれわたりてなけきたまへる
かたある所をよめる

道命法師

故郷は浅茅か原とあれはてゝよすから虫のねをのみそなく

平兼盛

浅茅生の秋の夕暮なく虫はわかことしたに物やかなしき

大江匡衡朝臣

秋風にこゑよわりゆく鈴虫のつゐにはいかゝならんとすらん

曾祢好忠

なけやなけ蓬か杣のきりきりすすきゆく秋はけにそかなしき

寛和元年八月十日内裏哥合によめる

藤原長能

まつことくきそ鳴人玉章をとゝさつねるかる初雁の声

ひとりしてまつひけるかりのなきけると

きゝてよめる

斎深法師

おきとかね我とこ世をそつかれ言にはかゝりとも知るや

後冷泉院御時后宮哥合によめる

伊勢大輔

はやう霧の空まて此駒ハ其のうち風や来るを待人

八月ばかり殿上のをのこともめして哥よ
ませ給けるに霧中駒迎といふことを

御製

さして行方も忘て駒の音のゆくへしらぬ霧をそ風

駒迎をよめる

良暹法師

逢坂の関の杉むら霜かれてあらはにみゆる望月の駒

源縁法師

みちのくのあたち乃駒ハなつめともけふ逢坂の関まてハきぬ

屏風の絵に駒迎したる所をよめる

恵慶法師

望月の駒引時ハ逢坂乃木の下やミもみえすそありけり

禅林寺に人々まかりて山家秋晩と
いふことをよみ侍りける

源頼家朝臣

暮ゆけハ浅芽か原の虫のねもおのへ乃鹿もこゑたてつ也（ねく）

公基朝臣丹後守にて侍ける時国にて
歌合し侍りけるによめる

源
二条前太政大臣家女房
坂号源少納言散位源頼範女

鹿の音に秋をしるかな高砂の尾上乃松ハみとりなれとも（ときハなり）

萩盛待鹿といふことを

御製

ひとりなきこゝちそよそにはさそしかなつまもたせぬ萩の錦は

山里乃鹿を聞て

大中臣能宣朝臣

秋萩乃咲はしをなく鹿の鳴らむ何ふ花は我のつまをと

去御門右大臣家歌合によみ侍ける

源為善朝臣

秋萩をちらしみ山の鹿の音を猶こさ物ゆつまそ恋しき

題不知

安法法師

蘿なる萩の下葉もみちそといひやりつゝ鹿そ鳴なる

能因法師

秋は猶わか身ならねと高砂の尾上の鹿も妻そ恋しき

夜宿野亭といふことをよめる

叡覚法師

ひとり寝そ鹿の音をきゝゆかしきやそ垣ねの秋の夜半

題不知

藤原長能

宮城野に妻よふ鹿そさけふなる本あらの萩に露や寒けき

祐子内親王家歌合によみ侍りける

大弐三位

秋霧の晴せぬ峯にたつ鹿は聲はかりこそ人にしらるれ

藤原家経朝臣

鹿の音そ寝覚乃とこにきこゆなる小野の草伏露やおくらん

江侍従

小倉山たちともみえぬ夕霧に妻まとはせる鹿そ鳴なる

題しらす　和泉式部

晴すのみものそ悲しき秋霧は心のうちにたつにやあるらん

天台座主源心

惜かりき命とおもひしふる宿の秋萩散るまて
猶ふるあはれけるほとをしれとみくしよめる

伊勢大輔

おきあかしみつゝなかむる萩の上の露吹みたる秋の夕かせ
みなせといふ所にてよめる

能因法師

思ふことなけれとぬれぬ我袖はうたてあるのゝ萩の露かな
きりのねさゝる小露乃をきさゝると人〳〵
よみ侍けるによめる

新左衛門

まくさよねくる萩か露ほしこそれやそれかさねるる露もこそ置

同し心を読侍ける　中納言女王

人まちしおもひやらふ秋萩のねにかゝりて露のこぼるゝ

八月晦かれの枝につけて人のもとへつかはしける

和泉式部

限あらむ中はかなくなりぬとも露ばかりの萩の上をだにしれ

をとこのたえたる人の家にまかり侍りしにいか
のおもしろく咲きけるを見てあしたにいか
にかゝりてきまほしかりけるとひつかはし侍

筑前乳母

白露もこぼれてやどにおひたる萩も宿に秋をしれ
家のあきさくへとこひけまいりあり

橘則長

かく露にあらむし枝さしてはおもひそらにおり人宿に秋萩
思ふ知

藤原通宗朝臣

秋風に下葉やさむくなりぬらん小萩か原にうつらなくなり

源時綱

君なくてあれたる宿の浅茅生に鶉鳴也秋の夕暮
草むしれ露をとよみてまつりける

藤原範永朝臣

けさきつる野原の露に我ぬれぬうつりやしぬる萩の花すり
よをそむきて後いはれのといふ所を

まえ侍りてよめる

素意法師

いそれ野の萩が錦露けさかきハ庭に袖の心ちこそすれ

寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍る

橘為義朝臣

いかにして玉をもぬかむ夕暮ハ荻の葉ことに結ふ白露

題しらす

藤原長能

ゆふかせのすゝき浅茅が末ことにみたれてぬける白露の玉

良暹法師

袖ふれハ露こほれけり秋の野ハまくりてそゆくへかりける

土御門右大臣家歌合によめる

源親範

秋の野ハおほかる花もとりまぜて錦に露のおきてさけたる

秋前栽の中におりゐてさけたるへく

世中のつねなきことをなけいてよめる

大中臣能宣朝臣

草のうへにおきてそあかす秋の野の露ことならぬ我身と思へハ

人の家のかきねに女郎花咲けるをよみ侍りける

堀河右大臣

女郎花をけとらせんなときえともなかれまそ宿けり
うへのをのこともに前栽ほりに小野宮よ
侍りていとをかしきにつかはしける
橘則長
女郎花おほかるのへにきもあまたにめくるとちきるかな

題不知　律師慶暹
秋風によるとすまふ女郎花もいく夜のへになきさふ覧

天暦御時御屏風に小鷹狩する野に
狩人やとまる所をよめる
清原元輔
秋の野にかりそ暮ぬる女郎花こよひはかりの宿もかさなん

無家有秋といふ心を
御製
宿ことにおなし野へをや移すらんかはりもみえぬ女郎花かな

題しらす
源道済
ませのうちにみなはゆる女郎花もかれなん枝は露におもふとも
あさなかなとよめる
和泉式部
あきとてもたのむへきらん世中とおもひすてかね秋の花

題不知
源道済

いとしくなくはめくるゝ夕暮に秋とおもほゆる風そふくなる

村上御時八月ばかりに上人のひとしくさら
らせ給ひて思ひ／＼によませ給ひけるを
さしすかにくしてにひさなまひきる

斎宮女御

はてなくにわびしき秋の夕暮は萩吹風の音そ身にしむ
右御門右大臣家に哥合し侍り
けるに秋風といふ事を

よみ人しらす

萩の葉に吹くる秋風の又ならぬさとをおとろかすなん

賀良親王かくし侍りけれはつかはし
ける

三條右近

はつきとも吹きかへ人はかくとも萩の上葉に風そふかなる
こむともたのめて待あらんとも身にしみて
あさりにれは秋風のをとしりけるかな
とりなくまでりけるは萩につかはしける

僧都實誓

萩の葉に人たのめなく風の音を我身にしめて明しつるかな
花山院歌合せけるを待りけんとしなるにても物
は侍にかれとて哥といひてまゐりけるり

秋風を　　藤原長能

萩風もやゝ吹そむる声すなりあはれ秋こそふかくなるらし

山さとの霧をよめる　　大納言経信母

明ぬるか河せの霧の絶まより遠方人の袖のみゆるは

土御門右大臣家歌合によめる　　藤原経衡

定めなき風のふかすも萩ハ心となひくこゝみえまし

野花を翫ふ心をよめる　　源師賢朝臣

行てみぬ人のためにと秋の野にいさしほりてそ花は折つる

天暦御時御屏風に八月十五夜前栽うへたるところをよめる　　清原元輔

ことしより植てみるへき我宿の花はいつれの秋かみさらん

らうにまかりて水辺秋花をよめる　　大中臣能宣朝臣

水の面に花の色ひとつとなつくるは千年の秋の色かはれとみつ

庭移秋花といふ心を　　関白前左大臣

我宿は梅の野へとてつゝりと花見にゆかん人まつまでや

野花を折りにとゆかんとよめる

良暹法師

朝な夕なに思ふ心ハ露なれやかゝらぬ花のうへしなけれ

橘義清家にて歌合し侍けるに庭よ

秋の花をはくもてといふ心をよめる

源頼家朝臣

我宿に千種の花を植つれは鹿の音のみや野辺に残らん

源頼実

我宿は花をうつさす植へつゝ鹿の音きかぬ野への辺也つゝ

題しらず

良暹法師

さびしさに宿を立出てながむればいづくもおなじ秋の夕暮

山さとにかへりて侍けるに

物をおもふなんそ侍れはよめる

和泉式部

なかなかに人もさそてみむいとしく物思ひまさる秋の山さと

後拾遺和歌抄巻第五

秋哥下

永承四年内裏哥合に擣衣をよみ
侍ける

中納言資綱

唐衣長夜すからうつ声に我さへねても明しつるかな

伊勢大輔

さよふけて衣してうつ声きけはいそかぬ人もねられさりけり

藤原兼房朝臣

さてねぬよや娘をもる人の衣うつ声たかくきこゆなる

花山院哥よみ給けるによみ侍ける

藤原長能

きそのねふかしてふ秋のよは月みる人のいふにそきけ

選子内親王いつきときこえける時九月の
ころほひまかりてあかつきかたになかく
人々なからむかしにさしよりてゆくも忍もう
はなれあかしなとひてよみ侍ける

斎院中務

月はいてゝきこしさき風の音にそ身はしむつらきものかなしさ

山家乃秋の風といふ心をよみ侍る

大弐
中宮越前

山里の賤の松垣ひまをあらみいたくな吹そ木からしの風

題不知　　源道済

み山ちハ紅葉しにけり山里ハ稀にこそ来ふハ独にふけハ

永承四年内裏哥合に

堀河右大臣

いろ里ハおなし時雨に紅葉すれとそての杜はすゝしかん

宇治のくんくりみちをとりてあそふらん

をよみ侍けるによめる

藤原経衡

日をへつゝ嵐ふく山みちの色にそ秋の行ハみゆる

長楽寺にすみ侍りける比人のもとよりこのころはなにことかとひて侍けれハよめる

上東門院中将

山里ハ木々の梢も紅葉して嵐そいかけ時のやまさと

屏風の絵に山里に家をかきて紅葉見えたる所をよめる

藤原兼房朝臣

旅人ハまきのもみちも紅葉の色に心のとまりぬるかな

紅葉散色をみしと思ふ心を今上よませ

給けるにそへてまいりける

右大弁通俊

いつまてはふかきみ山の菊の花秋はてしともなほこそ匂へ

西京にてよみたてまつりける人のもとへつかはして侍
まうらのこゝろを見てよめる

恵慶法師

植ゑし時あたしはなくて菊の花もとの色より独そ霧まさりける

中納言定頼かもとへしく小菊をつゝみけるに
こゝろもよらしてつかはしける

大弐三位

匂ふらむ方こそゆかめ君ならて誰にかみせむ白菊の花

上東門院菊合させ給けるによめる

侍まゐりてよめる

伊勢大輔

めつらしとみるもくやしく待む白菊は花より後の色なれは

藤原義忠朝臣

思ふにや下に深しる菊のもとつ色をと誰かいひけん

後冷泉院御時后宮の御方にて人々
残交庭菊よみ侍りける

大蔵卿長房

おきまよふ八重咲菊の九重にみゆるは霜のおけはなりけり

菊花たをりしてそ見るにはかりける人

のたまへりけれはつかうまつりける

清深養父

こゝろにもあらぬ花の色をみする人かはにほひをそせす

天暦御時御屏風に菊をとりてあそふ
家あるところをよめる

清原元輔

露くこそ家そみてけり菊のむ露やとりそてなくらん

屏風絵に菊花さきたる家にたちをと
つくる人のやとに所をよめる

大中臣能宣朝臣

うつろはむ人よわすれし菊のむらさきいろひそまさりそえし
いりしよりに侍ける人のもとにはなとおくりたり
まけましいは九月許菊のうつろひ侍ける
をみてよみ侍ける

良暹法師

白菊のうつろひゆくそ哀なるかくしつゝこそ人もかれしか
ゆきこさんよりはすゝまてく増われ
家に咲侍りけるにうつろひさく
の侍けるをよめる

藤原経衡

うゑし人のかくれは白菊の花なりされはうつろひにかゝり
五条なる所にわたりてよみ侍りける
ふかさむにことしもの菊をとりそかそ
ひけまてしよめる

中納言定頼

秋のみやゆかしといへは花のちるかの菊をうつろひ侍り
永承四年内裏歌合に残菊をよめる

中納言資綱

紫にうつろひにしを置霜の猶白菊と見するなりけり
寛仁二年正月入道前太政大臣大饗し
侍ける小屏風に山里の紅葉見る人きたる
所をよみ侍ける

前大納言公任

山里の紅葉見にとやおもふらんちりはてゝこそとふへかりけれ
屏風絵に山家に男女木下あり紅葉
をみんとてあそふところ

平兼盛

から錦色みてまかふ紅葉の散木のもとはたちうかりけり
山里に侍りてよみ侍ける

清原元輔

紅葉葉をしらてまかりし山里はよそにも見ゆる袖のなみたは

月前落葉といふことを

御製

紅葉ちるとやまの峯よりあやなくも月の影もる

落葉隠路といふことをよめる

法印清成

紅葉ちる秋の山へはしらかしの下はかりこそ色はみえけれ

故式部卿の御子大井にまかりけるにもみちをよみ侍りける

堀河右大臣

水上に紅葉流れて大井川むらこに見ゆる瀧の白糸

大井川にてよみ侍りける

中納言定頼

水もなく見えこそ渡れ大井川きしの紅葉は雨とふれとも

永承四年内裏哥合によみ侍りける

能因法師

嵐吹みむろの山のもみち葉は竜田の川のにしきなりけり

題しらす

藤原範永朝臣

みよりもはまそちるらんいそのみの錦は河面に浮きて

後冷泉院御時后宮哥合によめる

伊勢大輔

秋の夜ハ山田の庵にいなつまの光のミこそもりあかしけれ

師賢朝臣梅津山庄にて田家秋風
といふことをよめる

源頼家朝臣

宿ちかき山田の引板に手もかけて吹秋風にまかせてそみる

土御門右大臣家の哥合に秋田をよめる

祐挙

秋の田になみよるいねは山川の水ひきうへしさなへ成けり

源頼綱朝臣

夕日さすすその薄かたよりにまねくや秋を送るなるらん

九月尽日秋をおしむ心をよめる

藤原範永朝臣

あすよりハいとゝ時雨や降そハん暮行秋をおしむ袂に

九月尽日惜秋心をよみ侍ける

明はてハ野へをまつ見む花薄まねく方にや秋ハ行らん

九月尽日よみ侍ける

法眼源賢

秋ハたゝ今日計そと思ふにも夕暮にさへ成にけるかな

九月尽日伊勢大輔かもとにつかはしける

大貳資通

年つもる人こそいとゝおしまるれけふはかりなる秋の夕暮

九月晦夜よみ侍ける

源兼長

よもすからなかめてたにもなくさまむあけてみるへき秋の空かは

後拾遺和歌抄巻第六

冬哥

十月ついたちころ人のともに大井川にまかりてよめる

前大納言公任

おちつもる紅葉をみれは大井川井せきに秋もとゝまりけり

十月はかりもみちのころ紅葉のちるをよめる

僧正深覚

よのつねにちるもみちは錦そて秋の月よりひかりまされ

嘉保二年十月今上大井にみゆきせさせ

紹り

御製

大井川ふるきなかれをたつねきて嵐の山の紅葉をそ見る

桂の山庄にて時雨のし侍りけれは

藤原兼房朝臣

衣にも絶せぬなとする時雨かな人こゝろへもとよみ侍ける

山里時雨とよみ侍ける

永縁法師

神無月ふかく成行こすゑより時雨て渡るみ山への里

落葉時雨といふことをよめる

源頼実朝臣

木葉ちる宿はきゝわくことそなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

藤原家経朝臣

紅葉ちる音は時雨の心ちして梢のそらはくもらさりけり

十月許に山里にまかりてよめる

能因法師

神無月ねさめにきけは山里の嵐の声は木葉なりけり

宇治にまかりてよみ侍ける

橘義通朝臣

網代木に紅葉こきませよるひをは錦をあらふ心ちこそすれ

宇治の河わたりにまかりて紅葉を見て

中宮内侍

宇治川のはやく網代にかゝりせは何によりてか日をやへぬらん

俊綱卿伏見にて綾河千鳥とよみ侍けるによめる

藤原孝善

霜晴ぬあやの河へに鳴千鳥声にやさゆのとりゝこゝをたつ

永承四年内裏哥合に千鳥をよみ侍りける

堀川右大臣

佐保川の霜におきてふ鳴千鳥声はいてそね摘まそなき

相模

難波かたあさみつしほに鳴千鳥浦つたひする声きこゆ也

題不知

和泉式部

さひしさに煙をたにも絶しとて柴おりくふる冬の山里

冬月をよめる

大貳三位

山の端は名のみなりけり見る人の心にそいる冬のよの月

題しらす

増基法師

冬の夜にいくたひはかりねさめして物思ふ宿のひましらむらん

障子に雪のふりかゝりて侍ける所

民部卿長家

とやかへる鷹の尾ひさへ雪けれは身にあはせつるかな

たゝつまとよめる

能因法師

折にあふ富をやまかんみちの野風さしもの紅を島なすに

律師長済

蘇東も霜枯によりみゆる野は雑子のなくなれきゝまそ

屏風乃ゑに十一月女乃りくに人をとしゆるところを

大中臣能宣朝臣

霜枯の草むらはしはかくされてなへて人とはいつてあらぬ

影しらす

少輔

霜かれはひとつ色にそぬよきの千種にみえしのへにかはしや

霜落葉とくらむといふことをよめる

よみ人しらす

おち積る庭の木葉をよるのまに拂てきりとことゆるらし

おしまことよめる

大江公資朝臣

梢の枝とゆかしかふきる國の上にはなるけ霧ぞ立 かり

山里霧をよめる

橘俊綱朝臣

同人もふきかはふきれ我宿は好め霧たちへたてけり

永承四年内裏哥合に初雪をよめる

相模

都にも初雪ふれは小野の山まきのすみかま焼まさるらん

埋火を

素意法師

埋火のあたりは春の心ちして散くる雪を花とこそみれ

深厳式部卿の家にて松上雪と
いふ心をよみ侍りける

藤原国行

淡雪も松の上にしふりぬれはひさしく消ぬ物にそありける

隆経朝臣甲斐守にて侍りける時

紀伊式部

何方と甲斐の白根ハしらねとも雪ふることにおもひこそやれ

山雪をよめる

能因法師

白菊ゆへ心のうちにあゆみし山のたかねハ雪降にけり

題しらす

源道済

朝ほらけ雪ふる空をとみ渡せハ山のはことに月そのこれる

慶暹法師

こゝろもみえぬ雪こそ降にけれ今やとゝへやまへん

藤原国房

いつより降雪ふる里は志るかよりかるかの志は山にまよふらん

猿宿雪れんといふ事を

津守国基

独ぬる草の枕は伊勢まてともふりつむ雪をそえてみる

屏風絵に雪ふりたるところある女の

なかめしくる所をよめる

藤原長能

志やるんやとふともまされり志き山里は雪とかへて

道雅三位乃八条の家れ障子に山里

雪朝まちよしをかきたる所をよめる

藤原経衡

雪深きさまにて志られ山里は我よりさきに人はとはなり

源頼家朝臣

山里は雪こそふかく埋れとそてと年か里まよけるかな

法師になりてそひむろによけらぬ小家の

あした人のもとにつかはしける

信寂法師

志ひや里雪と山路もふしてかけの人のふみゝるを

題不知

和泉式部

こりつみて真木の炭やくけをぬるみ大原山の雪の村きえ

天暦御時御屏風の哥十二月雪ふる
ところをよめる
清原元輔
我宿にふりしく雪を春にまた年越ぬまの花とこそ見れ
雪朝大納言公任のもとにつかはしける
入道前太政大臣
おもしろく雪積らむと思ふ君ふるさとまそとおもて
雪鶴むすふあはれとにこそ待けれ
前大納言公任
梅の雪はてとりふそ積りしをはまちたく嶺まほ見え

落花をよめる
頼慶法師
けふもろはむへさへ惜しくくれぬめの花まれなりしとへちるなり
題しらす
快覚法師
さよふけて風やふくらん花の香のにほふ心ちのそらにする哉
入道前太政大臣修行のともにいくなと
来なとよめる
僧都長算
鶴そよそれかましかるのなかこやの池のあさかをり
題しらす
曽祢好忠

岩まにはかれるをひらきて出る道あるも今かならす

氷逐夜結　藤原孝善

むは玉のよをへてこほりの池は春とともにや波も立らん

後三条院東宮と申けるとき殿上にて

人々としくれぬるよしをよみ侍ける

藤原明衡朝臣

白妙にかしらもなりぬ我身にはとしのゆきさへつもりつゝ

十二月晦日ころ備前国より出羽弁

かりとてつかはしける

源為善朝臣

家こへ年とともにそふる人やみて春をも

むかへそうに

後拾遺和歌抄巻第七

賀哥

天暦御時賀の屏風哥春立日

源順

今日とてやおふしたてゝ待せし千年の春にあはん契りを

入道摂政賀し侍りける屏風なりけれ

梅のえかきつめるとこそと

平兼盛

松もせぬなりぬれ松のえし植へき宿のみえもとおか

同屏風によみ侍りける

武蔵野をとかすみのまにみわたせは行末遠き心ちこそすれ

東三条院四十賀し侍りける屏風に

男女子日しある所

源兼澄

宿はへあまたしく聲への松たれは君そ君か千世はさらに

前大僧正明尊九十賀に宇治にて侍りける

その竹の杖つくりけるをみてよめる

前律師慶暹

君をいのる年の久しく成ぬれは老の坂ゆく杖そ嬉しき

内裏御屏風によいのちなかれ人の家に

松鶴ある所とよめる

平兼盛

老松とこそ世にふる幾千代松と鶴との年をとりて

屏風の絵に海はたに雲一むらあり

源兼澄

一むらの雲とそなりきさらふらんあさき世をとみるまて

題しらす　よみ人しらす

君か代をなにゝたとへんとはかりに松のみとりも千世をとそ経

後一条院むまれ給て七夜に

参給へる女房侍らひてさかつきいたせと侍れて

紫式部

珍らしき光さしそふ月はもちなからこそ千世をめくらめ

後朱雀院むまれさせ給て七夜に

前大納言公任

いはけなき衣の袖はせはくともこふの上をはなてつくしてん

題不知　よみ人しらす

君か代は限もあらし浜椿ふたゝひ色はあらたまるとも

ある人云此哥七夜に中納言定頼かよめる

第一親王むまれ給ふを聞てうちつゝき

前斎宮女むまれ給て内裏よりうふや

しはひなとつかうまつりて人々うたよみ給
けるおりよめる
右大臣 顕房イ
色もかもちよの遠さかれるに生そふ松の二葉なるらし
小ねあつらし子うませ給へる七夜に
よめる
清原元輔
姫小松大原山のたねなれは千とせはたゝにまかせてをみん
近房朝臣むまれて侍りけるにうふや
ぬつかうまつるとてかきつけ侍ける
帝深恵

雲の上にのほらんまても見てしかな鶴の毛衣年ふとも
同七夜によみ侍ける
千代といのる心のうちの涼しきは絶せぬ家の風にそありける
第一親王のうまれさせけるに関白おほい
まうちきみさかつきとりて内へもまいり
給へりけれは内大臣下らうに侍りしかと
いつきまてまつりて侍けるを見てよめる
右大臣
千とせふる二葉の松にかけてこそ藤のわかえも春日さかゆれ
みこたちを冷泉院親王になしてのちよ

ませ給けり　花山院御製
めづらしき今日はあはれなりしこれもさくやり如なしとなりは
後三条院御子の家々中納言時今上おさ
なくなりし御しけるに中わりあるまじ有
てかんまいらせまれいうてかへとみよとて
給へりけるによめる
伊勢大輔
君これはちりをこりて万代のよはひをみるもます鏡かな
返し　閑院贈太政大臣
曇なき鏡の光ますますもてらさむ影よくれめや
むまこれたまへるをきこしめして御祝給
て後鶴の子ちよのためしきおりひつ
よしいひく給まいりけるに
藤三位
ちひやまこ又鶴の子のおひさきを千代とちぎりし松のせいさと
紀伊守為光たまへるをいとしてこれ
いたひく言よめといひ給へれはよめる
清原元輔
万代をそへむねは紀の国の子の日の松の玉もかかり
人のもきこえけるによみて給へる

住吉の浦の玉もを結ひあけてなきさの松の陰をたのまむ

人のおさなきかくれなきことを心にいれさせ
ゆりせ侍をなをしつかはしけるとて
よめる　　源重之

象にあまる千世を風のゆくすゑ小松か原よるもやすまて

大中臣輔長かうまれさせ侍けるに内蔵
のおほちにて輔親三位侍るときゝて
よめる　　藤原保昌朝臣

うゝくぬる親のおやとて祝ふなり子の子の世をそおもひやる

三条院みこの宮と申ける時帯刀陣の

歌合によめる　　大江嘉言

君か代は千世に一たひゐるちりの白雲かゝる山となるまて

承暦二年内裏歌合によみ侍ける
　　民部卿経信

君か代はつきしとそ思ふ神風やみもすそ川のすまんかきりは

宇治前太政大臣家にて三十講後歌合し
侍けるによめる　　藤原為盛女

とひやまとしそらちる人の君か為ひとつ心にいのりを

永承四年内裏歌合に松をよめる
　　能因法師

寿山岩ねの松ハ君か為千年のみかハ万代そへん

式部大輔資業

君か代ハ白玉椿八千世とも何にかそへんかきりなけれハ

冷泉院はしめてつくらせ給へるかと
せさいまゐるを御らんしてよませ給ける

後冷泉院御製

岩くゝる滝の白糸絶せすそ久しくよゝにへつゝみるへき

東三条院に春宮まいらせ給て池のう
きくさなとをとらせ給けるによめる

小大君

君とめハかこまつもなかりけり池の水とものしてそ

関白前おほいまうちきみ六条家にてはし
めてまかり侍ける時池のなかしまに
いふ題を人々よみ侍けるに

藤原範永朝臣

こゝろみに鏡とみゆる池の水に千世つゝすまん影そゆかしき

後綴朝臣丹波守にて侍る時の
臨時祭使にて藤花かさせるをみて

良暹法師

千年へん君かさせる藤の花松にかゝれる心ちこそすれ

後冷泉院御時大嘗会悠紀屏風近江国

亀山に松おほくおひたり

式部大輔資業

万代にちよを重てみゆるかなかめのをやまの松のみとりに

大嵐山をよめる

うこきなき大嵐山と立たれはおさまれる世そ長かるへき

陽明門院をしめて后にゐさせけるを

見て　江侍従

紫の雲のよそなる身なれとも立と聞こそ嬉しかりけれ

後拾遺和歌抄巻第八

離別部

祭主輔親か伊勢へまかりくたりけるにむかし
けるに小野花山紅葉ちりかゝれるを見てよみ
むとてつかはしける

恵慶法師

紅葉こそむかりし錦をきてかへれ君かへる世は誰とかは遠

返し

祭主輔親

惜むへき錦の紅葉まさるね秋のかたみにはえしもおらめや

田舎へまかりける人のもとにまかりとまりける
けるに侍しさりけれは柱にかきつけ侍

源道済

常ならはおそて悔しき跡しと歎くなる人のつましけれ

あつまへ下るとて京をいつる日よみ侍
けり

増基法師

数いつゝけさわかれにし都をも遠さて人を別ましかは

遠江守為憲か下り侍りけるにおもと
ころよりあふさきつわりしきによめる

藤原道経朝臣

別てのよとせの春のかるとにむれ都をとひかそへせよ

父のともに越後に侍りけるにおなじ国の
かしこより源為義朝臣の許につかはしける

藤原惟規

越後の実さらにこゆる雁をみてけさは都の人ぞ恋しき

都へまかりける人にはこなたぬ扇つかはす
とて

藤原長能

よそにても思ひ別のなごりにはみえなばしばし思ひ出よや

三月廿日越後守藤原為忠にくだり侍りけるに
何かさ給とて梅ちれ枝つくりあかり
むまひつきそ給ける

選子内親王

別るともさらぬ家居と別をきこる為家にいらむ

返し　為家為忠

別り行世をとりける為政によつされ松をこそ思ひやれ
人のもとへまかりけるに

藤原道信朝臣

誰か世を我もおもひぬ世中に給かれていつ何人すまん
入道摂政わつらひ給けるに大納言為経みて
かのよひ給にみられ参りてかへるとて
てみまかりて女の硯ありけるを

侍りける

藤原倫寧

君をのみ頼むたひなる心には行末遠くおもほゆるかな

返し　入道摂政

我をのみたのむといへは行末の雲れ世をとも君こそみめ

行しにくたりて侍けるにのちのかりんとて

いさあふしわかれにつかはしける

能因法師

山の端に月影みえは思出よ秋風吹は我もわすれし

源頼清朝臣みちのくにはてゝ又かの

このくにになりてくたり侍けるといひてあち

の前によみ遣しとてとらせける

相模

あひみれちよを遠よ君やとむ末の松より生れ出都に

大納言つねなりてくたり侍けるよ

人よあかりて侍りし書

いさゝき我命は人のてむまてそ待へきかなわか

對馬になりてくたり侍けるに侍の中

より能因法師かつかはしける

大江嘉言

命あらはと思ひ侍の生れ出るに嬉しの薫れるに

橘のりみつみちの国へくたり侍けるに侍る
をしけり
中納言定頼
行初の別と云へと白河の世きとゝめぬは波まとなり
義通朝臣十二月のころほひ宇佐使よ
まかりけるにあきはかりしかはりてむ
なとたれりひて餞給ひけるにかはりけり
てよめる
橘則長
別路はあつさふよりを憐さと哀雲わふか蒼ん上すん
侍しへてはへよむまのまさむけしまた
とてくさけたゝへてひめりすゝかひ

て侍らんとて人にはあきあらへてよそう
く梅をわすらにおいあをしとあそひ
あしふけりふよみ侍ける
蓮範法師
年まりを我そ遠き境りとん程を待命あかね
侍しよりのかりて良暹法師のもとに
つかはしける　　よみ人しらす
別るへき中とこそくむすほゝれくあるひきまさそとふやさ
返し
良暹法師
名残ある命と思ひてともつらのえりやくるとまつまゝと

能因法師いよの国にくたりけるに
別をしみて　藤原定経朝臣
春は花秋は月にと契りつゝけふを別とたれかおもはさりけり
能因法師いよの国よりのほりて又くた
りけるに人々むまのはなむけしてお
くらんとしけれは
源兼長
とゝめても春たにも花のゆくへはいつちかはまし
かへらふ人のみちれ国に侍けるにつかはし
けり
源道済
思はよみちは遠よかぬとも心のうちは山をとてそし
のくにへまかりけるに人々ゆきてさくら
よみ侍れは
御の人さらはなをと中くにおそそ今日はなかり
讃岐へまかりける人によみてつかはしける
中納言定頼
松山の松風吹よせは恋ひて思へこの忘れ貝
返し　源光成
君ねより忘れもせぬ衣手に松風のさそ松浦
君よりしいつもまかりくたり侍けるに

餞給ひけるにかはりて

源兼澄

このたひはわかれの人に秋をとめんとはえてそ

大江公資遠江守にくたりけるに

餞すとてしはすの十日ころよみ侍る

源為善朝臣

暮て行年とともにそ別ぬるみちにや春はあはんとすらん

あからさまに井中へまかるとて女のもと

にいひつかはして侍ける夜のにしられし

しもさけと世をさこゆかとあはいとなむ

んちこそまれといひく侍けれは

祭主輔親

おほかたの雲路にゆくともしるへくしれよはりめや

橘道貞式部をわすれてみちの国に

まかり侍けるに式部かもとにつかはしける

赤染衛門

行人もとまるもいかに思ふらん別てのちのまたのわかれを

物いひける女のいつちともなくてとをき

所へなんゆくといひ侍けれはよめる

中原頼成

いつちともしらぬ別の旅なれといかて涙のさきにたつらん

むつましくなりてわかれとおもふときゝとこ
ろよりかへりけるはかんなのりとより雲
井をかたにいくこそおなかれみのこち
もしの道とはひく侍ける程をまり
侍りをこしける

祭主輔親

道とほみ雲ゐなりとも心のよそに程はへたてし
侍しへまかりけるむすめに

藤原節信

帰りては誰とみむとかおもふらん老てひさしき人はありやと
侍しけりの別侍けるに人の別おしみ
侍けるに

連敏法師

つくし舟またともつなもとかなくにさし出る物は涙なりけり
いはりへくたるとて能因法師のもとに
いひつかはしける

大江正言

藤の花数よ経絶くやくと立そふ出雲へゆく
寂昭法師入唐せんとてつくしへま
かりくたり侍りて七月七日ふねにのり

けふつかはしける

前大納言公任

天の川後乃けふたにはるけきをいつともしらぬふなてかなしな

入唐し侍けるみちより源心かもとに
をくり侍ける

寂昭法師

その程と契る旅の別たにあふことまれにありとこそきけ

成尋法師入唐し侍りてのちか
のはゝのもとにつかはしける

読人しらす

いかはかり空をあふきてなけくらんいく雲井ともしらぬ別を

後拾遺和歌抄巻第九

羈旅

石山にまゐりけるみちにて走井
にてよみ侍ける

堀河右大臣

相坂の関とはきけと走井の水をはえこそとゝめさりけれ

十月廿日あまり比ゆしてまかりける
わうつきに雲乃かゝりたるをよみ侍り
けり

前大納言公任

紅葉の紅葉は色をみるへきに雲とゝもにや急きあへさ

返し

中納言定頼

雲わけて急きけれとも紅葉は色にみえぬは花もはし

熊野の道にて御心ち不例におはしま
しけるにあまのしほやきけるを御覧して

花山院御製

旅の空よはの煙とのほりなはあまのもしほ火たくかとやみえん

熊野へまゐりけるたひにて吹上乃浜を
みて

懐円法師

都にて吹上乃浜を人とはゝけふみるはかりいかてかたらん

くまのへまいりけるみちにて月をみ侍て

少輔

山の端にさかりしくそ見しか峯にさくと秋月そまち
舟よりのほりてかりえといふところにとまりて
とてよめる

藤原國行

しらそて小見えつ杣何まて波路の雁ハつらそゆきてよ

津の国へまかりけるみちにて

能因法師

蘆の屋のこやのわたりに日ハ暮ぬいつちゆくらん駒にまかせて

あつまへまかりけるみちにて

増基法師

秋のころありみまで東路を駒のへにまかせてそゆく
いはまにふしそりけるにたよりに都よりの
かりのなくに鳴けれハよみ侍ける

和泉式部

こゝろありけるはまふく都なる家こひしくと我にきかせよ
正月ハかりに近江へまかりけるに鏡の山
ふくあめにかくれてよめる

恵慶法師

鏡山こゆる今日しも春霞たちかくるゝやハなつかしの春
七月ついたちころよそにありけるにてよめりける

に夕涼ミにせき山をこゆとて志はし
車とゝめてやすミてよみ侍ける
赤染衛門
越てハ都も遠く成ぬらん関の夕風しハしすゝまん
題不知　増基法師
今日わり合す雨さへふらむあそ紀の山ハそれとそなん
津の国よくたり侍きり小猿宿を望の
んゝとよみ侍ける
良暹法師
まくのへやおかえ乃峯小やとりして雲あ小ゆう侍哉

為善朝臣三河守にて侍りけるに
すのまたといふわたりにおりゐて志ぬ
はしらかさをこやつもてよめる
能因法師
白雲乃へよりミゆる足引の山の高根やみさかなるらん
あつまれくへ國ありけるにふら海まといふ
ところにてよめる
源重之
東路にこゝを浦まはいふなれは人のおもハゝかり
ちかれより小舟は出まよくてりてとし人哉

のち下野守になりてくたり侍けるにはま
なのはしのもとにてよみ侍ける

大江廣經朝臣

東路のはまなの橋をきてみれは昔恋しきわたりなりけり

志かすかのわたりにてよみ侍ける

能因法師

思ふ人ありとなけれとふるさとはしかすかにこそ恋しかりけれ

みちのくにゝまかりくたりけるに白河
関にてよみ侍ける

都をは霞とゝもに立しかと秋風そ吹しら川の関

出羽国よりのほりてさりけることゝもいふと
ころにて

世中はうきてもつけさりけるも我宿のあとやと我宿は
うしとしておもひきるみちにすまれ
ぬにもあらなくに

大中臣能宣

須磨の浦をけふすきゆくとこしかたへかへる波やことつて
なくしてはまちえてけるかなしか
るへきをみん

大弐高遠

風吹ハ峰の嵐ふきて我を思ふ方へそゆけ

書写聖人にあひてそれより後のまた
たゝし侍りしにふところの月を
御らんして　　花山院御製

月影ハ旅の空とてかハらねと猶都のミ恋しきやなそ

たちまのはしに志おあまにとて海
わりて月のあかゝりける夜中家盛
盤所よりかめてまうり侍ける
　　　　中納言資綱

おほつかな都の空やいかならん今宵明石の月をみるにも

返し　　　　紫式部

漣らん明石の浦風まし　きふかく秋の月は空にしるらん

常陸よくてりけるみちふかく月のは
しく侍りけるとよめる

　　　　康資王母

月ハく雲ゐなかれたみる掖と家都のそらまては

宇佐使ふく侍りけるたひに海上
月といふ心をよみ侍ける
　　　　橘為義朝臣

都にて山のはにみし月影をこよひハ波の上にそまて

つくしへまかりて月のおもしろかりける夜よめる

藤原国行

都出て雲ゐはるかに来ぬれども猶西にこそ月は入けれ

つくしへまかりけるみちにてよめる

西宮左大臣

なかふともあまりに程の経ぬるかな雲居よおもはしき

はるかにて侍けるにおもしに
てよみ侍ける

帥前内大臣

故郷のやまかぜふけば明石なるかたもひとつかかりけり

出雲国にながされ侍けるみちにて
よみ侍ける

中納言隆家

ゆきとまる都の外にやどりせめてぞ露まで袖

伊予国より十二月十日ころに舟にの
つきていそのまよりのぼりけるに

式部大輔資業

急ぎ行ふなでぞをそき都の内よ花見む春に逢ぬべく

つくしよりのぼりけるみちにながやうと
屋まといふところをすぐとてよめる

右大弁通俊

あらし吹せきのしらひよふきてしくもそらつにやまと山

越後よりのかりけるにたへはえて山のと

ふりしくふるく月のかつらけれは

橘為仲朝臣

老やはし月みるあひよらひやるをは捨山も嶺なるらん

去ころか中よりのかりけるみちにて

源道済

見渡せは秋はそくぬるめんとなれる山は霧てそつ

たかしみちふかく

はるふけてこその乃かりしやいつなれんけの

治れ急まはつるや

後拾遺和歌抄巻第十

哀傷哥

一条院御時皇后宮かくれ給ひてのち帳
のかたひらのひもにむすひつけられたる
文を見つけたりけれは内にも御覧
せよとおほしかほに哥三首か
きつけられたりける中に

よもすから契し事を忘すはこひん涙の色そゆかしき

知人もなき別路に今はとて心ほそくもいそきたつかな

おなし女の結けるをまかりてとらせ
結けるはいまはなくなりにきといひ
たれたるよあは

源兼長

返こそ限なけれとゝまることを海のよそ駿ん
やまてふことに結けるに人とゝら
くすゝみえ結まれはよめる

和泉式部

ゆきのわか煙よつきそふゐるまゝ我と人のくせ

三条院皇后宮かくれ給ひて葬
送乃秋月のあかく結けるによめる

なきて天雲かくれさせ給ひにし長楽よすゑの月をみれは

命婦乳母

円融院法皇うせさせ給ひて紫野に
御葬送侍りけるにひととせこの
所にて子日せさせ給ひしことを
おもひ出てよみ侍りける

左大将朝光

紫の雲のかけても思ひきや春の霞になしてみんとは

大納言公成

かくはかり常にみゆきは急しを煙によそへぬ旅のかなしさ

長保二年十二月に皇后宮うせさせ給を
あはれにて葬送の夜雪ふりて侍け
れは　一条院御製

野へまてに心ひとつはかよへとも我みゆきとはしらすやあるらん

入道前太政大臣の葬送のあしたに人々
はかりにまかりて雪のふり侍けれはよみ侍
りける

法橋忠命

薪つき雪ふりしける鳥へのは鶴の林の心ちこそすれ

入道一品宮かくれ給ひて葬送の
とりへのにまかりて侍る日侍りけるに

かくしける　　侍従命婦

これをこそ思ひありきれぬる山立帰りつるけさなれは

二月十五日のよにやをとこなくなりにけれは

葬送の後よみ侍りけるにつかはし

ける

いまはとて薪もつきぬる君か代をつきそめしとみるそ悲しき

返し　　よみ人

時しもあれ春のなかはにあやまたぬよはのけふりはうたかひもなし

三条院御時皇太后宮かくれさせ給ひにけれは

給ひける時葬送人々よみ侍りける人のうせ

しを給ひて御葬送の夜よみてつかはしける

よみてまつりけるとききてつかはしける

山田中務

後の世のかなしとほかなしき秋よもまきれ

ものかなしきやそのころやとりけける人の

りもとにつかはしける

相模

同しころとひやけむ小露きえしよいつそ君か袖は濡れや

返し　　大和宣旨

涙川わかるてみなとしてねや袖のかりそめ人のそらなん

後一条院御時中宮九月にうせ給ひを
後朱雀院御時又弘徽殿中宮
八月にうせ給にけれはいつれのこゝろやり給
ける侍従少将かもとにつかはしける

前中宮出雲

いかはかり君歎くらん数ならぬ身たに時雨し秋の哀を

右兵衛督経成身まかりにけるその
のちにいりしとのあつひたゝとせんせ
てはへりけるころ郎下にこもりて侍を
侍りつかはしける

小左近

よそにゝ袖そ露けき柏木のもりの雫をおもひこそやれ

霊山にこもりて侍る人にあはんとてまかり
たりけるに身まかりて後十三日にな
なりて物忌とてこもりて侍れは

能因法師

ぬしなしとこたふる人はなけれとも宿のけしきそいふにまさる

右兵衛督俊実子におくれて歎き
侍けるにつかはしける

右大臣北方

いかはかりさひしかるらん木枯の吹にし山の秋のゆふ暮

おやなくなりてやまてらにはへりける人の
もとにつかはしける

よみ人しらす

山里にそのもみち葉見にまかりてこのもとにいふかひかりん
出羽弁か親におくれて侍けるにいひつかはしける
て月をなかめてあはれなることいひ
侍りけれはよみ侍りける

前大納言隆国

とゝめけん別し人のふるさとにふるまてみへさらんちやせし

返し

出羽弁

悲しさのなくさむひまはなけれともまてみえさらむ世に
高階成棟父にまかりおくれてまかりにける
ころにて侍りけれは

中宮内侍

おもひきや人のなくなりて後にきさきの宮にまゐり
清原元輔かもとにさるへき月頃あり
けれはもとのこゝろにこもりてしはしとす
きさらきにいひつかはしける

源順

宵のまの空の雲ともなりぬらん天のいかなる谷にかあるらん

橘則長こしにくだり侍りけるころ
ゆくころよりにつかはしける

橘季通

とりかへし思ひ出るに悲しきは別れしままの道にぞありける

後冷泉院御時いとあやしくて久しく
ふして侍りけるに世をそむきぬと
聞きて上東門院のとぶらはせ給ひける御
返事にたてまつり侍りける

式部命婦

とひやまし後ての別れ名残こそさらにきえぬへかりしを

後二条関白につかはせ給ひてのころほひ
まゐり侍りてさらしけて六月一日又
さきなるし雨ふり侍りけるは先帝御事
なとかたりいひおこせてや侍りけん

周防内侍

五月雨はいかにとぞ見るかはりし世をあはれ空もおぼさでや絶

二条前太政大臣のめまてなり侍りてその
ちおほくあけりけるをみてよめる

中納言定頼母

あはれとも思ひしむは玉のみかうなれ形見なれ
そふなくも侍けるにゆめにみてよみ侍
ける　　藤原実方朝臣
うたゝねのこの世の夢のはかなきにさめぬやかての命ともかな
又の月俤りにけるいつにちよみ侍ける
藤原相如女
夢みすと歎し人を程もなく又我夢にみぬそ悲しき
相如ひ侍ける女のなくなりて月頃ありに
それは女のもとやかりしにつかはしける
藤原実方朝臣

契りありて此世に又は生るとも面かはりして見もや忘れん
一条摂政身まかりてのちかれこれのまへにと
なとそへてくてちゐもしりなり侍
けるは　　小将藤原義孝
今はとて同し村雨にふるまさにひとりあるむなしき
小式部内侍なくなりて侍りけるそのちむま
こともの侍けるをみてよみ侍ける
和泉式部
留めおきて誰をあはれと思ふらん子はまさるらん子はまさりけり
一条院うせ給てのちなてしこの花

の給けるを後一條院おさなくおはし
ましてなにこゝろもしらせ給けれは

上東門院

みるまゝに露そこほるゝおくれにし心もしらぬ撫子の花

道信朝臣もろともにもみちみむなと
ちきりて侍けるに身まかりてのち秋
よみ侍りける

藤原実方朝臣

みむといひし人ははかなく消にしをひとり露けき秋の花かな

五月のころ女におくれて給けるとしの
雪ハふり給けるをよめる

大江匡房朝臣

別れにしその五月雨の空よりも雪ふれはこそ恋しかりけれ

かの中に給けるかくに京に給けるおや
おもくなり給よしきゝていそきのほりて
やまさきにてまかりぬときゝて
てよみ侍りける

大江嘉言

なからへは今ハいそくむ都にはまいりてさ人をあかく歎なり

敦道親王におくれてよみ給ける

和泉式部

今はたゝそよそれとゝ思出て忘るゝはかりのうきとも
かなしゝわまふなくむとこひく

捨はてむと思ふにさへそ悲しけれ君よ馴にし我身と思へ

十二月晦夜よみ侍ける

なき人の来る夜ときけと君もなし我すむ里や玉なき里

右大将道房身まかりて後ふみつかへすとて
侍けるに懐のうちに文のいはきけるをとて

土御門右大臣女

別れにし人はくへくもなきものをいかにふるまふ侍らんふる　六

法しよりかへりのまきけるにふかくな
つましける人をとふらひ出てよみ侍ける

前大宰大貳高遠

忘しされぬる秋かまされと世中のはかなき河ゝ菱とそ見し　こゝ

兼經卿ほのめかくなりて後越前よ
めくはかりてくりけるに紫米つかはす
とてよみてはべる　源道成朝臣

わしされにつめとおもふ涙かけしと思ふ猿の心の
少納言なくなりて後のまとなりしとかと
なけき侍てあさるありける百和香をとらい

されたにいまくせうしとの源政朝臣の
もとにつかはしける

選子内親王

法のためつみけむ花を数には今は世のかたみとぞみる
思人ふたりありけるをとこにわすらるかくなり
て侍けるに忘れよ揃いてられきこえ人にかは
すてゝりし女のもとにつかはしける

伊勢大輔

いかにさそふらん袂はまさるらめ涙はあまた色にふかめ
服きて侍けるころ十月一日ならしはべる

なき人をこれのこなたんおなじ色をくふかく
とひはかくせく侍けるにはなかり

康資王母

君のとやものゝ色にも身ちらなく袂は露はあまた秋なり
赤染衛門よをそくまてのちの五月
五日侍りけれしける

義作三位

墨染の袂はいとゞ忘られであやめの草のねや数及
後朱雀院うせ給てみのりはてて
のわさなくされるやるにまゐりける

御乳母の藤三位乃つほねにくしくさを
いれたるにおいかけしのてれま孫
ゑそへさせ給ひし時よみ侍ける

一条院御製

花とこそ見てしとう都はゐなやちよの椎柴の袖

後冷泉院位につかせ給ひてまゐられたる
さとにまかりいて侍て又乃としの
あさ三条乃つほねにまゐりうへく
侍けるをれいとへのおりてりそまて
きこえ侍ける

麗景殿前女御

こそよりもことしはこれ藤の波の為の卯杖(うつゑ)は
成順によそくまてく又乃としその
わさし侍けり

伊勢大輔

別にしその日はめくりきて行(ゆき)もかへらぬ人そ恋しき
そのとしころみ侍ける女にかはりて
おそて乃わさ行ひ侍けるにまゐりて

紀時文

年をへて別るる人を別れはそれにこそしれ思ふまて有けり

返し　清原元輔

別れんとてそ渡川とひやかれそれかふるをと

後一條院御時皇太后宮よ世ゟをそ経

てのちこれまたにさふらひあり家

まいりける女房の中よりきこえの

かくさいつゝさりしやいひよかくせく

侍けるハ　江侍従

我身にハ悲しきことのつきせねハ昨日をはてとそ思はさりけり

又の服ぬき侍けるによめる　平棟仲

思ひの都見にし深し墨染の衣にはなへもかわきあへかな　平教成

落くこそ衣はなきハかり重たれ涙のかはの袖にか

服ぬき侍けるによめる　藤原定輔女

これをかの形見とおもひつゝ藤衣そては涙にくちにつれ

十月ついたちのほとりにまかりけるみちに一条院とおほしくて車をとゝめてみるれハひとこそやかたの侍けるを見てよめる　赤染衛門

消にける浄土の燈のひとゝて燃ぬし君そ悲しき

菩提樹院に後一条院御影をかきたる
るを見て見奉りしことなと
なと思ひ出てよみ侍ける

出羽弁

いかにしてうつしとめけん雲居にてあかすかくれし月の光を

道済よをそむきてのち石山にまゐり
侍けるにふるき家のいたく荒れ
て侍りけるをとはせければおやにおく
れてはかなくなりて侍ると
いひければよめる

赤染衛門

独こそあれゆくとこは歎きつれ主なき宿はまたもありけり

後朱雀院に殿上人にてまゐりけるに一条院の
うちの人々ありけるなかにいとゝころ
にとまりてむかしを思ひ出てよめる

源信宗朝臣

古にかはれともかはらねと涙のかゝるおもひはなかりき

かくよみて侍けるを聞てふるきて伝
宗朝臣のもとにつかはしける

伊勢大輔

とひやる衣かにかくしはひく薫のかをれはなそかれ
あき成りける人をとこいそしよめる

源重之

年毎に昔ハとをく成ゆけとうかりし秋ハまたもきにけり

しかはかり契しものを渡り川かへるほとにはわするへしやは

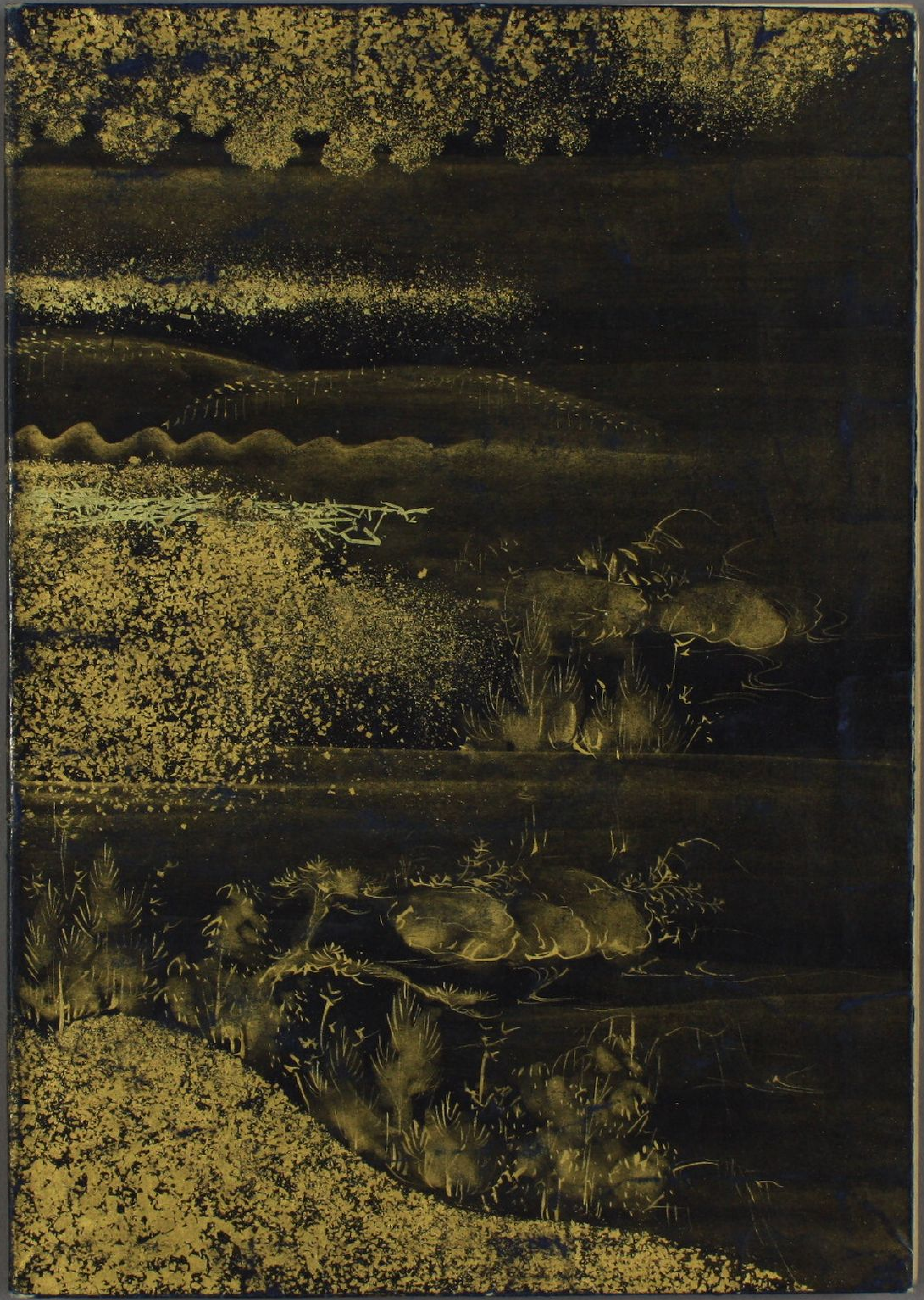
此ある義孝少将わつらひ給けるに
なくなりぬともしはしまて経よみ
はてむといもうとの女御にいひて
ありてかくなく成りてのちわ
さまてくらしてけれハその母
のゆめにみえ給ける歌也

時雨とハ千種の花そ散まかふ何ふるさとに袖ぬらすらむ

この歌義孝少将うせ給てのち
十月より賀縁法師の夢にここ
ちよけに笙をふくとみえけれハ
とききてかくすゝになんありけるは
またなけくにここちよけにていふ
やといひけれハ母のをときゝてめて
くこそよめるとなむいひつたへたる

きて別し衣の袖をつゆぬるよ別し秋よかなしけれ
此哥男はりてのちおくらしる
秋いりしとの兼に少将義孝と
て見え給きつとなん

逢ことをみかな夢よにいそあそては夢路なりてかひなかり
或人云此哥はなりふ女をかよはさて男
まうりふけつむしあれゆめふ
これの女よらせよとて見えし
つりけつ
むすめあれ女のりとにやかはとそよめる

よみ人しらす
なからも君は昔の我人の文こそいとど逢
女つゆしくなきさて紀すかよめる
なからふるとみちれなるへて秋よ
ゆきていまなかれ

以下
3 丁
白紙